SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

対格付き不定詞構文の歴史的発達と意味機能

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大村, 光弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00001105

対格付き不定詞構文の歴史的発達と意味機能[1]

大　村　光　弘

1　はじめに

現代英語には例外的格標示構文（exceptional Case-marking construction）と呼ばれるものが存在する。これは、埋込節中の意味上の主語が、統語的には母型動詞（心理的知覚動詞）の目的語になっている構文である。

(1) I believe [him to be honest].

この構文を持つ言語は数のうえで限られており、他のゲルマン系言語やフランス語などのロマンス系言語には見られない。では、なぜ現代英語に例外的格標示構文が存在するのだろうか。また、いつ頃から存在しているのだろうか。本稿では、通時的観点からこれらの疑問に回答を与える。その中心的主張とは以下のようなものである。OE期には、他のゲルマン系言語同様、英語には(1)のような構文は存在しなかった。しかし、ME期になって、不定詞構造に(1)の構文を許すような変化が生じた。結果として、現代英語に(1)の構文が存在している。

解説の都合上、以下の議論では、＜母型動詞＋対格名詞＋埋込動詞＞といった統語形式を持つ構文を対格付き不定詞構文、または、AI構文と呼ぶことにする。次節では、本稿で用いる理論的枠組みを提示する。3節と4節では、不定詞の発達を通時的に観察するとともに、例外的格標示構文の起源と発生要因を探る。

2　枠組み

2.1　意味と形式の対応

まず初めに、本稿が採用する理論的枠組みを解説しておきたい。本稿は、機

能文法（Functional Grammar; Bolkestein (1990), Hengeveld (1987, 1989, 1990, 1996), etc.）が提案する発話の階層構造（Layered Structure of the Utterance）に、Hornstein (1990) の提案する時制理論を融合させた意味的・機能的枠組みを考案し、さらに、この意味的・機能的枠組みと近年の生成統語論との融合を図る。

上記の機能文法の文献で盛んに論じられてきているのは、発話の基底をなす意味的・機能的構造が順序づけられた階層構造を成すというものである。

(2) 発話の階層構造[2]：

$$(E_1 : [(F_1 : ILL\ (F_1))\ (S)\ (A)\ (X_1 : [\ (e_1 : [(f_1 : Pred_\beta\ (f_1))\ (x_1 :)]\ (e_1))\ ]\ (X_1))]\ (E_1))$$

(E_1)	節（Clause）	(e_1)	叙述（Predication）
(F_1)	発話内述語（Illocutionary Predicate）	(f_1)	述語（Predicate）
(X_1)	命題（Proposition）	(x_1)	名辞（Term）

それぞれの層は、独自の指示対象（designation）をもつ。

(3) 各層の指示対象：

層	指示対象
(E_1)	発話行為（Speech Act）
(F_1)	発話内の力（Illocution）
(X_1)	命題内容（Propositional Content）
(e_1)	事態（State of Affairs）
(f_1)	関係／特性（Relation／Property）
(x_1)	個体（Individual）

名辞(x)は述語(f)の項となることがあり、このとき、叙述層が形成される。叙述は可能事態の集合である。この可能事態の集合は時制によって特定の事態に限定される。すなわち、話者が心に描く特定の事態を指示する潜在的力を得る。叙述(e)は真偽値をもつことがあり、このとき命題層が形成される。命題(X)は(S)(A)とともに発話内述語(F)の項となることがあり、このとき発話内述語層が形成さる。話者が、何らかの伝達的状況の下で発話内述語層を用いた

ものが節(E)である。言い換えるならば、節(E)とは、発話行為の結果としての文そのものである。

Hornstein (1990) は、時制が発話時 (Speech time)、基準時 (Reference time)、出来事時 (Event time) の3要素から構成されると考えている。発話の階層構造に Hornstein の考え方を融合させ、更に統語構造との対応関係を示したものが本稿の提案する(4)である。

(4) 統語構造とその意味機能：

	統語構造	指示対象	時制構造との対応
1	$[_{VP}$ V . . .]	関係／特性	出来事時(E)
2	$[_{IP}$ Infl(tenseless) $[_{VP}$ V . . .]]	事態	基準時(R)
	繋ぎ留め操作 (R_nをE_n-1に結びつけよ) の適用		
3	$[_{IP}$ Infl(tensed) $[_{VP}$ V . . .]]	事態／命題	
	時制形態素		発話時(S)
4	$[_{CP}$ C $[_{IP}$ Infl(tensed) $[_{VP}$ V . . .]]]	事態／命題／発話内の力／節	

(4)において、VPの存在は出来事時の存在を、Infl の存在は基準時の存在をそれぞれ意味している。Infl が非定形のとき、埋込節の基準時は母型節の出来事時に連結する。また、時制形態素の存在は時制構造における発話時に対応している。

(5) a. I believe John to have told a lie.

b. S_1, R_1, E_1

E_2 —— R_2

発話の階層構造という観点から見れば、VPは関係や特性を表し、IPは事態を表している[3]。IPが独立時制を持つということは、主節として用いられうることを意味する。別の言い方をすれば、潜在的に命題として用いることができることを意味する。おそらく、発話内の力はCに存在していると思われるが、このことは本稿の趣旨とは直接関係しないので詳しい議論は避けることにする。

3 OE期のAI構文

3.1 データ

OE期のAI構文には、以下にあげた3つのタイプが観察されている[4]。

タイプA: 使役 (Verbs of Causing (lætan, don, etc.)

(6) *ChronE* 116. 10 (963) ----- Denison (1993: 172)
& leot him locon þa gewrite þe ær wæron gefunden
and caused him look-at the writings that earlier were found
'and had him look at the writs which had been found'

(7) *ÆCHom* I 31. 468. 20 ----- Denison (1993: 172)
Swa swa ðu dydest minne broðor his god forlætan . . .
as as you made my brother his god forsake
'Just as you made my brother forsake his god'

タイプB: 物理的知覚 (Verbs of Sense Perception (gehieran, geseon, etc.)

(8) *Bede* 4 21. 322. 2 ----- Denison (1993: 175)
þa semninga gehyrdon we þa abbudissan inne hludre stefne
then suddenly heard we the abbess inside loud voice

cleopian . . .
call (INF)
'then suddenly we heard the abbess calling inside in a loud voice'

タイプC: 心理的知覚動詞 (Verbs of Mental Perception (geliefan, witan, etc.)

(9) *PsCaA* 1 (Kuhn) 13.5 ----- Denison (1993: 176)

ðorh	ðone	usic	arisan	holde	mode	we
through	him/who	us	arise (INF)	devout	mind (INST)	we

gelefað
believe
'we devoutly believe that through him we will rise again'

ここで注意しておかなくてはならないのは、OE期のタイプC動詞（すなわち、心理的知覚動詞）のAI補文がラテン語の翻訳に限られており、ラテン語のAI構文の形式をそのまま真似たものであったということである。このことは、OE期の心理的知覚動詞に見られたAI補文が、OE本来の文法ではないことを意味する (Denison (1993), Fischer (1988, 1989, etc.))。言い換えれば、OE期のAI構文は、タイプAとタイプBの動詞（すなわち、使役動詞と物理的知覚動詞）の補文に限られていたことになる。ここで、使役動詞と物理的知覚動詞の間の意味的共通点に着目してみたい。その意味的共通点とは、母型動詞によって表される行為と埋込動詞によって表される行為が同一場面に位置づけられることである。たとえば、使役構文を例示した(6)と(7)では、母型主語が埋込主語に対して特定の要求を課し、続いて埋込主語がその場で要求された行為を遂行している。言い換えれば、埋込動詞が表す出来事が母型動詞の表す出来事の一部を成し、全体として1つの場面を構成していることになる。つぎに物理的知覚構文に目を向けてみよう。(8)においても、埋込動詞が表す行為と母型動詞が表す行為は同一場面で生じている。しかも、母型主語は埋込主語が大声で叫ぶのを直接耳にしているのであるから、これら2つの行為は同時的である。

3.2 意味機能に基づく構造分析

2節で提示した枠組みに基づいて、OE期の使役構文と物理的知覚構文を分析してみよう。前節で述べたように、使役動詞と物理的知覚動詞が AI構文を従えるとき、母型節が表す出来事と埋込節が表す出来事は同一場面で生じているということが観察される。このことは、埋込節の表す出来事が母型節の表す出

来事に対して時間的・空間的に厳しく制約されていることを意味する。ここで、OE期の使役構文と物理的知覚構文に対して(10)を想定してみよう。V_1とV_2とACCはそれぞれ、母型動詞と埋込動詞と対格名詞句を表している。

(10) $[_{IP}$ Subj $[_{I'}$ Infl $[_{VP}$ V_1 $[_{VP}$ ACC $[_{V'}$ V_2 . . .]]]]

埋込節はVPであるので、繋ぎ留め規則（Hornstein（1990: 154-156））の適用によって、埋込節の出来事時E_2は母型節の出来事時E_1に連結される。

(11) S, R, E_1
|
E_2

(11)に示される時制要素の連結関係によって、埋込節の出来事が時間的・空間的に主節のそれに依存していることが導かれる。

4 AI構文の歴史的発達

4.1 OE期の与格不定詞

4.1.1 不定詞の歴史的発達

まず初めに、〈不定詞の歴史的発達〉という言葉が含意するところを明らかにしておく。印欧言語において、不定詞は行為名詞から次第に動詞体系に組み込まれる方向で発達する傾向にあることはよく知られている[5]。つまり、今でこそ様々な動詞的・文的特徴をもつ不定詞であるが、歴史を遡れば、純然たる名詞だったのである。ゲルマン祖語の不定詞もやはり行為名詞であって、対格・与格・属格といった屈折語尾を伴っていた。Wright and Wright（1908: 260）は、不定詞の属格不定詞はOE期までに消失し、対格不定詞と与格不定詞が生き残ったと述べている。いずれにしても、〈不定詞の歴史的発達〉とは、純然たる行為名詞であった不定詞が、次第に動詞化されていく過程として言い換えることができる。

現代英語をみてみると、不定詞と呼ばれているものには原形不定詞と to 不定詞の 2 つがある。前者は対格不定詞が発達したものであり、後者は与格不定詞が発達したものである。すでに述べたように、原形不定詞も to 不定詞も、

行為名詞であった不定詞が名詞体系から動詞体系に移行した結果生じたものである。後の議論に関わってくるので、対格不定詞と与格不定の語尾について、ここで若干の説明を加えておくことにする。対格不定詞の語尾は名詞の対格語尾と同形であったが、いわゆる動詞の無屈折形として位置づけられていた。

(12) *ÆCHom* I 31. 468. 20 ----- Denison (1993: 172)
Swa swa ðu dydest minne broðor his god forlæt-an . . .
as as you made my brother his god forsake-ACC
'Just as you made my brother forsake his god'

一方、与格不定詞の語尾は名詞の与格語尾と同形であって、対格不定詞の語尾と比較すると明らかに有標 (marked) であった。

(13) *ÆHom*. I. 142 ----- Callaway (1913: 137)
Crist, seðe com to gehæl-enne ure wunda
Christ behold came to cure-DAT our injuries
'Look! Christ came to cure our injuries'

不定詞が動詞的になればなるほど名詞体系の特徴である格語尾の消失を意味するであろうから、より有標な属格不定詞語尾や与格不定詞語尾から消失していくことが予測される。既に述べたように、不定詞の動詞化にともない、OE期では既に属格不定詞が消失していた。

では、なぜ与格不定詞が生き残り、現代英語の to 不定詞に発達するに至ったのであろうか。まずはじめに、現代英語の to 不定詞の起源に関する仮説を提示したい。

(14) 与格不定詞と対格不定詞の形態的区別を保持するために、格付与子としての前置詞 to を補った形式が、to 不定詞の起源である。

つぎに、(14)の仮説を支持する根拠を述べる。OE期の与格不定詞は、(13)に示したように、前置詞 to を伴っていたが、それ以前の印欧言語では状況は異なっていた。たとえば、ヒッタイト語では、前置詞を伴わない与格不定詞が用いられていた。

(15) Hittite, *KUB* XXX 15, I, 1-2 ----- Disterheft (1989: 167)
nu SAL. MES ukturiya hastiyas lessuwanzi[6] panzi
pt women ukturiya (DAT) bones (DAT) collect (INF) go (PR sPL)
'The women go to the ukturiya to collect bones'

印欧祖語から英語に至るある派生段階において、与格不定詞に前置詞 to を補った形式が生まれたと考えられるが、この理由として推測されるのは、不定詞の動詞化に伴う与格不定詞衰退の危険性が生じたとき、意味領域を異にしていた与格不定詞と対格不定詞の間の形態的区別を保持するために、与格付与子であった前置詞 to を補い与格不定詞語尾を保持しようとしたということである。そして、これが to ＋動詞という形式の起源である。

では、なぜ前置詞 to が選ばれたのであろうか。考えられる重要な要因は、前置詞 to が担っていた意味領域と与格語尾が担っていた意味領域との間に重なりがあったことである。具体的にいえば、両者が広い意味での〈着地点 (Goal)〉を表していたということである。たとえば、(16)と(17)にあげた to 前置詞句はそれぞれ、〈方向〉と〈目的〉を表しており、(18)と(19)にあげた与格不定詞の例もそれぞれ、〈方向〉と〈目的〉を表している。

(16) *Orosius*, 19, 17 ----- 小野・中尾 (1980: 469)
oð he cymð to Scirincges heale
until he came to Sciringesheal
'until he came to Sciringesheal'

(17) *Orosius*, 18, 3 ----- 小野・中尾 (1980: 469)
hiora hyd bið swiðe god to sciprapum
their hide is very good for ship's ropes
'their hide is very good for the ropes of ship'

(18) *ÆHom*. II. 346 ----- Callaway (1913: 42)
Hwi onscunast ðu to underfonne ðisne lichaman ?
why fear you to receive this corpse
'Why do you fear to receive this corpse?'

(19) *ÆHom.* I. 142 ----- Callaway (1913: 137)
Crist, seðe com to gehælenne ure wunda
Christ behold came to cure our injuries
'Look! Christ came to cure our injuries'

また、(15)にあげたヒッタイト語の与格不定詞が〈目的〉の意味を表していることからも、OE以前の印欧言語では、前置詞を伴わない与格不定詞が〈着地点〉の意味を表していたと思われる。

この節をまとめてみよう。不定詞はもともと純然たる名詞であったのが、次第に動詞化しながら発達した。この発達の過程で、不定詞は名詞的特徴を失ってきた。とりわけ、与格語尾消失の危機は同時に、文法の中で〈着地点〉という重要な意味領域を担っていた与格不定詞の用法に重大な影響を及ぼす危険があったと考えられる。この理由から、類似した意味領域をもち且つ与格付与子であった前置詞 to を補って、与格不定詞の形態語尾を維持しようとしたものが to 不定詞の起源である。

4.1.2 与格不定詞の構造

この節では、OE期の与格不定詞の内部構造について論じる。結論からいえば、OE期の与格不定詞の内部構造として(20)を仮定する (Fisher (1996)、Kageyama (1992)、 Tanaka (1994)などを参照)。

(20) $[_{PP}$ to $[_{VP}$ V-enne . . .]]

(20)では、前置詞 to が補部としてVPを従えている。現代英語の to 不定詞がIP構造をなすという定説を前提にすると、(20)の構造では、Infl 投射に依存する現象が観察されないという予測が成り立つ。実際、OE期の与格不定詞は、完了形や進行形で現れることはなかったし、また、否定標識 ne と共起することもなかった (Kageyama (1992) 参照)。与格不定詞の全体的範疇がPPであることを支持する統語的証拠も存在する。たとえば、OE期の与格不定詞は、前置詞句と等位接続されることがあった (Callaway (1913)、Mitchell (1985: §965) などを参照)。

(21) *Bede* 162, 7 ----- Callaway (1913: 139)
Ut eode to his gebede oððe to leornianne mid his geferum.
out went to his prayer or to study with his friends
'He went out to say his prayers or to study with his friends'

4.2 ME期の変化

ME期の不定詞構文に議論を移す前に、OE期のAI構文について論じてきたことをまとめておくことにする。すでに3節で見たことだが、OE期のAI構文は、使役構文と物理的知覚構文に限られていた。したがって、現代英語のように、心理的知覚構文にAI構文が用いられることはなかった。使役構文や物理的知覚構文では、母型動詞がVP補部を取っているため、母型節が表す出来事と埋込節が表す出来事の間に同一場面性が観察された。この意味的特徴は、埋込節の出来事時が母型節の出来事時に連結されることから導かれた。4.1節では、OE期のto不定詞構文に焦点を当て、その意味的・統語的機能について論じ、OE期のto不定詞（与格不定詞）が(20)の内部構造をもつことを観察した。現代英語のto不定詞がIP構造をなすという定説を受け入れると、当然引き出される推論は、to不定詞の内部構造が英語の歴史の中でPPからIPに変化したということである。4.2節では、この仮説を裏付ける証拠をあげながら、本稿の理論的枠組みに基づいた歴史変化の説明を試みる。

4.2.1 与格不定詞内部の変化

ME期には、与格不定詞内部で幾つかの形態的・統語的変化が生じた。この節では、これらの歴史的変化が持つ意味について考察する。

第1に、(22)-(24)に示した分離不定詞（split infinitive ; Visser (1966: 1035ff.)、Mustanoja (1960: 515f.)）と(25)に示したpro不定詞（Visser (1966 : 1061ff.)）から始めよう。

(22) ±1390, *Gaw. & GK*, 88 ----- Mustanoja (1960: 515)
he lovied þe lasse auþer to longe lye or to longe sitte
he loved the less either to long lie or to long sit
'he loved either to lie long or to sit long'

(23) 1275, *LayBrut*, Otho, 6915 ----- Gelderen (1993: 41)
fo [r] to londes seche
for to countries seek
'to seek countries'

(24) ±1380, Wyclif, *Matthew* 5, 34 ----- Gelderen (1993: 41)
Y say to ȝu, to nat swere on al manere
I say to you to not curse in all ways
'I tell to you not to curse in any ways'

(25) 1400, Mannyng, *Handlyng Synne*, 6401-6402 ----- Gelderen (1993: 42)
ey wlde nat do／For hym þat þey were ordeyned to
they wanted not do for him what they were appointed to
'they did not want to do for him what they were appointed to'

OE期では、分離不定詞と pro 不定詞の例は見られず、ME期になって初めて現れるようになった。これら2つのタイプの構文が生起するようになったことは、to と不定詞との結びつきが弱まったことを示している。

第2に、(26)にあげた受動不定詞 (van der Gaaf (1928a, b)、Fischer (1991)、Mustanoja (1960: 519ff.)) と(27)にあげた完了不定詞 (Mustanoja (1960: 516ff.)) について考察してみよう。

(26) 1400, Mannyng, *Handlyng Synne*, 1546 ----- Mustanoja (1960: 520)
þey be to be blamed eft þarfore
they are to be blamed again for that reason
'they are to be blamed again for that reason'

(27) 1350, *The Tale of Gamelyn*, 291 ----- Mustanoja (1960: 517)
Gamelyn com erto for to have comen in
Gamelyn came there for to have come in
'Gamelyn came there in order to have come in'

これら2つのタイプの構文も、OE期には見られずME期になって初めて生じたものである。受動形式の不定詞や完了形式の不定詞が生じるようになったことは、不定詞の動詞化・節化が著しく高まったことを表している。

最後に、不定詞語尾 -e(n) の消失について考察してみよう。不定詞語尾 -e(n) は与格不定詞語尾 -enne が弱化したものである。Gray (1985: 493ff.) によれば、不定詞語尾 -e(n) は15世紀末までに単なる表記上の要素にまで弱化していた。また、Roberts (1993: 261) によれば、不定詞語尾 -e(n) は16世紀の初め頃に消失した。すでに4.1.1節で概観したことだが、不定詞はもともと純粋な名詞であったのが次第に動詞的特徴を強め、ついには節的な特徴も持つまでに至るという歴史的過程を経て現代に至る。格語尾が名詞の典型的特徴であることを考えると、格語尾を失うということは、典型的な名詞的特徴を失うことを意味する。Gray や Roberts 等の観察から推測すると、与格語尾 -enne が ME期の末までには格語尾としての位置づけを失っていたと思われる。

ここで、ME期の to 不定詞に関して生じた変化と、その変化がもつ意味についてまとめてみよう。OE期に名詞的特性を色濃く保持していた不定詞は、ME期には入って動詞的特性を強めていった。とりわけ、15世紀から16世紀頃に迂言的受動形や完了形を取るようになったことは、to 不定詞が節のように感じられるようになったことを反映している。このことは、to 不定詞が(20)に示したPP構造から(28)に示したIP構造へ移行し始めたことを示している。

(28) $[_{IP}\ [_{Infl}\ \text{to}\ ]\ [_{VP}\ \text{V . . . .}\ ]]]$

(28)では、前置詞 to の文法化が進み Infl として再分析されている。この変化は15世紀から16世紀頃に生じ、完了したのは初期近代英語期と考えられる。

4.2.2 AI構文の拡張と機能的分析

to 不定詞補文に関して、ME期に見られる興味深い変化の1つに、AI構文が心理的知覚補文に拡張されたことがある[7]。

(29) 1380, Wyclif, *Bible*, Luke 8, 46 ----- Visser (1966: 2313)
I have knowe vertu to haue gon out of me
'I have known virtue to have gone out of me'

(30) 1445, Pecock, *The Dnet*, 104, 7 ----- Visser (1966: 2309)
I beleeue euerlasting liif to be or to come
'I believe everlasting life to exist or to come into existence'

3.1.節で述べたように、OE本来の文法として、心理的知覚動詞の補文としてAI構文が用いられることはなかった。ここで、なぜME期になってこのようなAI構文の拡張が起こったのかという疑問が生じる。本稿の主張に関連する仮定を(31)に示しておく。

(31) a. 時制が（独立して）解釈されるのは、発話時・基準時・出来事時の3要素が存在するときであり、このときに限る。
b. 不定詞補文の基準時が母型節の出来事時に結合される（$E_1=R_2$）と、補文内の時制は（依存時制ではあるが)、あたかも発話時（'S_2'(≒R_2)）を持つかのように解釈される。
c. IP構造を持つ不定詞節は、繋ぎ留め操作が適用された結果、あたかも全ての時制構成要素（すなわち、S, R, E）を持つかのように解釈され、結果として、命題層の機能を果たし得る[8]。

2節で概観した枠組みを用いると、OE期の与格不定詞構造(20)は、VPは含んでいるがIPを含んでいないので、動詞がもつ論理的意味構造（たとえば、述語項構造）のレベルを表すことはできても、話者が心に描く特定の事態を表すことはできない。これは、VPの表す事態を空間的・時間的に位置づける手段を欠いているからである。しかしながら、to不定詞の内部構造がIP構造に移行したことは、機能範疇Inflの存在によって、依存時制ではあるが基準時をもつ手段を得たことを意味する。さらに、(31b, c）に示した仮定によって、不定詞は、話者の心に描く特定の事態を指示する潜在的能力を得たことを意味する。すなわち、IPが表す事態は、心理的知覚動詞の補文として用いられたとき、命題内容を表すことができる。

本稿の分析を支持する証拠がる。英語がAI構文を心理的知覚動詞の補文として用いるモデルとしたのがラテン語文法である。ラテン語では、不定詞に現在・過去・未来を表す形態素が付加していた。

(32) Latin

a. Dicit te veni-re
say (PRE 3SG) you (ACC) come (INF PRE)
'He says that you come'

b. Dicit te ven-isse
say (PRE 3SG) you (ACC) come (INF PER)
'He says that you came'

c. Dicit te ventu-rum esse
say (PRE 3SG) you (ACC) come (INF FU)
'He says that you will came'

このことは、不定詞補文が母型節との関係で、独自の基準時をもっていたことを意味する。さらに、不定詞補文が基準時を持つことは、心理的知覚動詞の補文となって命題内容を表すことができたことを意味する。

(33) Latin

credo terram esse
believe (PRE 1SG) earth (ACC) be (INF PRE)
'I believe the earth to be round'

ギリシャ語の不定詞も、ラテン語の不定詞と同様の形態的特徴をもっていた。すなわち、現在・過去・未来を表す形態素が接尾辞として付加していた。予測されることであるが、ギリシャ語の心理的知覚動詞もまたラテン語の心理的知覚動詞と同様に、不定詞補文を従えることができた。

(34) Greek

Σωκρατηζ ηγειτο θεοζ παυτα ειδευαι
Socrates believed Gods (ACC) all (ACC) know (INF PRE)
'Socrates believed Gods to know every thing'

英語は、盛んにラテン語を借入したり翻訳したりした言語であるので、ラテン語の影響を強く受けていたことが予測される。したがって、心理的知覚動詞がAI構文を従えていたラテン語をモデルとして、同様の構文を発達させたことは十分に考えられる。また、不定詞補文に基準時が存在するラテン語やギリシャ語のような言語で、心理的知覚動詞の補文としてAI構文が用いられていたことと、IP構造を得たことで心理的知覚構文の補文としてAI構文を用い始めた英語の歴史を見ると、不定詞が心理的知覚動詞の補文となることと基準時の存在（IP構造の存在）が密接に結びついていることがわかる。これは、ある言語表現が命題内容を表すためには、その言語表現が表す事態が時間的・空間的に位置づけられうる統語的環境が要求されるからである[9]。

5 結語

元々純然たる名詞であった不定詞は、次第に動詞化されてきた。とりわけ、to不定詞（与格不定詞）は、ME期からModE期にかけてIP構造に再分析された。ラテン語の影響もあって、to不定詞は心理的知覚動詞の補文となる資格を得た。この歴史変化は、(4)と(31)に示した統語構造・意味機能・時制構造の対応関係に基づいて説明された。

---

1 本稿が対格付き不定詞構文（accusative with infinitive）と呼んでいるのは、埋込節中の意味上の主語が、統語的には母型動詞の目的語になっているものである。

2 ILL, S, A はそれぞれ、発話内の力（Illocution)、話者（Speaker)、聞き手（Addressee）を示す。また、ILLがとりうる値には、断定（declarative)、疑問（interrogative)、命令（imperative）などがある。

3 VP内主語仮説（VP-internal subject hypothesis）を想定すれば、VPはさらに述語と項の論理的意味関係も表しているといえる。

4 Callaway (1913: 107-131), Denison (1993: 172ff.), Fischer (1988, 1989, 1991, 1992, etc.), Fischer and van der Leek (1981), Nagucka (1985), Roberts (1993), Tanaka (1994), Trnka (1930), Visser (1973: 2234-2336), Warner (1982) 等を参照。

5 Disterheft (1989) 参照。

6 (15)において不定詞に接辞化している形態素 (u)wanzit は、与格不規則変化接辞 (dative heteroclite suffix) である。

7 この変化に関しては、Gelderen (1993: 61)、Mustanoja (1960: 526ff.)、Visser (1966: 2309ff.)、Warner (1982: 134ff.) を参照。

8 言語によっては、命題を表す不定詞補文がCPの場合もあり得る。

(i) French ----- Kayne (1981:359)

Je crois [$_{CP}$ C [$_{IP}$ PRO Infl [$_{VP}$ avoir fair une erreur]]]

I believe have made a mistake

'I believe myself to have made a mistake.'

(ii) Italian ----- Kayne (1981:353)

Gianni crede [$_{CP}$ di [$_{IP}$ Infl [$_{VP}$ essere intelligente]]]

Gianni believe be intelligent

'Gianni believes himself to be intelligent.'

(iii) European Portuguese ----- Raposo (1987:87)

Eu penso/afirmo [$_{CP}$ terem [$_{IP}$ os deputados [$_{VP}$ trabalhado pouco]]]

I think/claim have the deputies worked little

'I think/claim that the deputies have worked little.'

9 英語の心理的知覚動詞がAI構文を従えるようになったことは、モデルとなるラテン語のAI構文があったこと (Trnka (1930: 84)、Mustanoja (1960: 527)、Visser (1973)、Lightfoot (1981: 113)) に加えて、語順の変化 (SOV→SVO) (Fischer (1989, 1991, 1992, 1994a, b, 1995) が考えられる。

引用文献

van der Auwera, Johan and Louis Gossens (eds.) (1987) *Ins and Outs of the Predication*, Foris, Dordrecht.

Baker, Carl L. and John McCarthy (eds.) (1981) *The Logical Problem of Language Acquisition*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Bolkestein, A. Machtelt (1990) "Sentential Complementation in Functional Grarnmar:Embedded Predications, Propositions, Utterances in Latin," in Jan Nuyts, Machtelt Bolkestein and Co Vet (eds.)

(1990), 71-100.

Britton, Derek (ed.) (1994) *English Historical Linguistics 1994* (Papers from the 8th International Conference on English Historical Linguistics), John Benjamins, Amsterdam.

Callaway, Morgan (1913) *The Infinitive in Anglo-Saxon*, Carnegie Institute of Washington, Washington, D. C.

Denison, Robert (1993) *English Historical Syntax: Verbal Constructions*, Longman, London.

Devriendt, Betty, Louis Goossens and Johan van der Auwera (eds.) (1996) *Complex Structures: A Functionalist Perspective*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Disterheft, Dorothy (1980) *The Syntactic Development of the Infinitive in Indo-European*, Slavica Publishers, Columbus, Ohio.

Eaton, Roger, Olga Fischer, Willem Koopman and Frederike van der Leek (eds.) (1985) *Papers from the 4th International Conference on English Historical Lingistics* (Current Issues in Linguistic Theory 41), John Benjamins, Amsterdam.

Fischer, Olga (1988) "The Rise of the 'for NP to V' Construction: An Explanation," in Graham Nixon and John Honey (eds.) (1988), 67-88.

Fischer, Olga (1989) "The Origin and Spread of the Accusative and Infinitive Construction in English," *Folia Lingistica Historica* 8, 143-217.

Fischer, Olga (1990) "The Rise of the Passive Infinitive in English, in Dieter Kastovsky (ed.) (1990), 141-188.

Fischer, Olga (1992) "Syntactic Change and Borrowing: The Case of the Accusative and Infinitive Construction in English," in Marinel Gerritsen and Dieter Stein (eds.) (1992), 17-88.

Fischer, Olga (1994a) "The Fortunes of the Latin-Type Accusative and Infinitive Construction in Dutch and English Compared," in Dieter Kastovsky (ed.) (1994), 91-133.

Fischer, Olga (1994b) "Verbal Complementation in Early ME: How Do the Infinitives Fit in?" in Derek Britton (1994), 247-269.

Fischer, Olga (1995) "The Distinction Between *To* and Bare Infinitival Complements in Late Middle English," *Diachronica* 12, 1-30.

Fischer, Olga (1996) "The Status of *To* in Old English *To*-Infinitives: A Reply to Kageyana," *Lingua* 99, 107-133.

Fischer, Olga and Frederike C. van der Leek (1980) "Optional vs. Radical Re-Analysis: Mechanisms of Syntactic Change," *Lingua* 55, 301-350.

van der Gaaf, Wim (1928a) "The Predicative Passive Infinitive," *English Studies* 10, 107-114.

van der Gaaf, Wim (1928b) "The Post-Adjectival Passive Infinitive," *English Studies* 10, 129-138.

van Gelderen, Elly (1993) *The Rise of Functional Categories*, John Benjamins, Amsterdam.

Gerritsen, Marinel and Dieter Stein (eds.) (1992) *Internal and External Factors in Linguistic Change*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Hengeveld, Kees (1987) "Clause Structure and Modality in Functional Grammar," in Johan van der Auwera and Louis Goossens (eds.) (1987), 53-66.

Hengeveld, Kees (1989) "Layers and Operators in Functional Grammar," *Journal of Linguistics* 25, 127-157.

Hengeveld, Kees (1990) "The Hierarchical Structure of Utterances," in Jan Nuyts, Machtelt Bolkestein and Co Vet (eds.) (1990), 1-23.

Hengeveld, Kees (1996) "The Internal Structure of Adverbial Clauses," in Betty Devriendt, Louis Goossens and Johan van der Auwera (eds.) (1996), 119-147.

Hornstein, Norbert (1990) *As Time Goes by: Tense and Universal Grammar*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Kageyama. Taro (1992) "AGR in Old English *To*-Infinitives," *Lingua* 88. 91-128.

Kastovsky, Dieter (ed.) (1991) *Historical English Syntax*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Kastovsky, Dieter (ed.) (1994) *Studies in Early Modern English*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Kayne, Richard (1981) "On the Certain Differences Between French and English," *Linguistic Inquiry* 12, 349-371.

van Kenenade, Ans (1993) "The History of English Modals: A Reanalysis," *Folia Linguistica Historica* 13, 143-166.

Laposo, Eduardo (1987) "Case Theory and Infl-to-Comp: The Inflected Infinitive in European Portuguese," *Linguistic Inquiry* 18, 85-109.

Lightfoot, David (1981) "The History of Noun Phrase Movement,' in Carl L. Baker and John McCarthy (1981), 86-119.

Mitchell, Bruce (1985) *Old English Syntax: Concord, the Parts of Speech, and the Sentences* 1, Clarendon Press, Oxford.

Mustanoja, Tauno F. (1960) *A Middle English Syntax*, Part 1, Société Néophilologique, Helsinki.

Nagucka, Ruta (1985) "Remarks on Complementation in Old English," in Roger Eaton, Olga Fischer, Willam Koompan and Frederike van der Leek (eds.) (1985).

Nixon, Graham and John Honey (eds.) (1988) *An Historical Tongue*, Routledge, London.

Nuyts, Jan, Machtelt Bolkestein and Co Vet (eds.) (1990) *Layers and Levels of Representation in Language Theory: A Functional View*, John Benjamins, Amsterdam.

Roberts. Ian G. (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative History of English and French*, Kluwer, Dordrecht.

Tanaka, Tomoyuki (1994) "On the Realization of External Argument in Infinitives," *English Linguistics* 11, 76-99.

Trnka, Bohumil (1930) *On the Syntax of the English Verb from Caxton to Dryden*, Imprimerie de L'état, Prague.

Visser, Frederikus Th. (1966) *An Historical Syntax of English Language*, E. J. Brill, Leiden.

Warner, Anthony (1982) *Complementation in Middle English and the Methodology of Historical Syntax*, Croom Helm, London.

Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright (1908) *Old English Grammar*, Oxford University Press, Oxford.